

スイカ作りに挑戦しよう 三島市立沢地幼稚園(静岡県三島市)

[5 歳児]

毎年、季節の野菜栽培を楽しんでいる。今年は「スイカを育てたい」という子どもたちの声があったので、地域のスイカ農家のT氏の指導を仰ぎながら、スイカ作りに挑戦してみるようになった。

	活動の様子	子どもの言葉
苗を植えよう	<p>[5 月] 地域のスイカ農家のT氏から、「スイカはたくさん栄養を食べないと大きくなれないから、土にたくさん肥料を入れること」を教えてもらう。また、「地面に草が生えなくなり、土の中が温くなる“マルチ”という黒いシートで土を覆うとよいこと」を覚えてもらい、スイカへの興味を深める。</p> <p>ポットから苗を出すやり方を知っているので、子どもたちは苗を傷めないようにポットから出し、マルチの穴に植える。</p> 	<p>A 児「肥料ってなあに？」 T 氏「スイカの栄養だよ」 A 児「ふーん、じゃあ、スイカの食べ物ってこと」 T 氏「そうだ、いいこと言うんだな」 T 氏「マルチっていうだよ。これをやると地面に草が生えないし、地面が暖かくなってスイカが温かくていい気持ちで大きくなるさ」 B 児「いい気持ちのお風呂だね」 C 児「違うよ、お布団だよ」 D 児「でかでかスイカがなるかもね」</p>
花が咲いた	<p>[6 月] 6月の雨でつるがぐんぐん伸びて、日差しも強くなる。スイカの葉や花、実が傷まないように敷いたスキの葉っぱが、からからに枯れた頃、黄色い小さな花が咲く。スイカの花を見たことのない子どもたちは嬉しそうにのぞき込んでいる。T氏に7番目の葉の先に出来た花に実がなる話を聞く。植えた苗は7本。蔓が伸び、花がたくさん咲いた。そして1番目の葉から数えて7番目に小さな実が付いたものがあちこちに見られ、子どもたちと保育者は喜んだ。</p> 	<p>花を見た時 「キュウリの花に似ているね」 「可愛いね」</p> <p>「すごいねえ、これにみんなスイカがなったら、食べきれないほどたくさんスイカができるねえ」</p>
赤ちゃんスイカ	<p>結実した実が腐ってぼろりと落ちるのが、次々と見られる。子どもたちも保育者も大きく失望し、大きな疑問を抱いた。</p> <p>そしてT氏に3回目の指導を受けることにする。T氏がミツバチや蝶の受粉の様子を「花と花が仲良くなるよう、あっちこちの花に触ってるんだよ。仲よしになれなかった花の実は途中で駄目になって、腐ってしまうよ」と話すのを聞く。</p>	<p>「何故腐るの？」 「せっかくスイカの赤ちゃんができたのに!？」</p> <p>「ミツバチや、チョウチョは大事なお仕事してるんだねえ」 「虫さんたちは偉いねえ」 「頑張ってるんだ」 「そんなの知らなかった」</p>
何時食べられるの	<p>園の小さな畑に大小全部で11個スイカができた。今回、指導してくださったT氏もお呼びして、いよいよスイカ収穫祭の始まりです。担当が指でスイカを叩き音を聞く。「カンカン」といい音がした。</p> <p>D児が代表で先生の真似をしてスイカを叩く。緊張しながら、慎重に叩く。どうしていいかわからないD児にT氏が「食べてもいいですよ」と言う音ですと、嬉しそうな顔、顔、顔、顔。</p> 	<p>「僕もやりたい」「私も」 「いい音がする」「コンコンだって」 「いい音だね」 「こっこのスイカも叩いてみよう」 「同じ音がするかな」</p>
考察	<p>* スイカ栽培は困難というイメージがあったが、地域の方の力をお借りしての栽培活動は、子どもたちの「何故」「どうして」の思考の場を広げ、探求し、思考し、納得する経験ができた。また自然への興味関心、生命の不思議、感動など普段体験できない活動につながり、どうなっていくんだろうという、知りたい、やってみたい、挑戦したいという意欲につながったと思う。</p> <p>* 自然界のおきてや仕組み等未知との遭遇、葉から数えて7番目に花が咲き実がなることやミツバチの働きなど普段の生活では知り得ない事柄を学び、親子で驚きと感動を体験できた。</p>	

みどころ

栽培の経験を重ねているので、子どもたち自身に「何故」「どうして」という疑問が自然にわき上がります。そして、その疑問を追求していこうとする意欲や欲求から、地域の専門家の具体的な情報や方法を興味深く見聞きしています。幼児らしい擬人化した表現の中からも、「そういうことなんだ」と幼児なりに納得したことが伝わり、科学する心が育まれている様子うかがえます。